宝物

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
宝物

【Ｎコード】
Ｎ５５２３Ｇ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
漫画が大好きだけれど買ったものは全く大事にしない真次。ある日テレビで見たある人の漫画を譲り受けてもらおうとしたがお母さんが彼に言うこととは。宝物はその人それぞれなので大切にしなければいけないです。

第一章

宝物

飯沼真次は本が好きだった。特に漫画が大好きだ。
だから読みたい漫画は何があっても買うしそれで部屋は漫画で一杯になっている。
古い漫画は古本屋で買うしネットでも取り寄せる。そうして今まで色々な漫画を読んできた。
「あんたって本当に漫画が好きなのね」
お母さんもそんな彼に呆れてしまっている。
「いつもいつも漫画で」
「誰にも迷惑かけてないからいいじゃない」
彼はその漫画を読みながらお母さんに言葉を返した。その大きな目で。
「そうじゃない？部屋の掃除だってちゃんとしてるし」
「まあそれはね」
整理整頓はしっかりとしているからお母さんもそれは文句はなかった。
「それにちゃんとアルバイトして自分で買ってるしね」
「だったらいいでしょ？」
「それでも。凄いなんてものじゃないわよ」
それでも言いたいことはあったのだった。
「全く。漫画漫画って」
「面白いじゃない」
「他にはないの？読みたいものとか買いたいものとか」
「小説も読んでるよ」
素っ気無くこう返す真次だった。
「ちゃんとね」
「そういうのじゃなくて。他に欲しいものとかはないの？」

「別に」
その漫画を読みながらの言葉であった。
「ないけれど。全然ね」
「全然なのね」
「うん、全然」
また答えるのだった。
「ないよ。本当にね」
「趣味は漫画ってわけなのね」
「うん」
きっぱりと答える。
「そういうこと。誰にも迷惑はかけないよ」
「それでも。他のことに興味を持って欲しいものね」
お母さんはそれが言いたいのだった。
「将来漫画家になるのならいいけれど」
「じゃあなろうかな」
「勝手にしなさい」
こんな調子だった。とにかく始終漫画を読んでいるのだった。だが彼は漫画に対して一つ癖と言っていいものがあった。それが何かというと。
「また捨てるの？」
「うん」
買った漫画をすぐに捨てるのである。今古本屋に売るところであった。真次とお母さんは家の玄関で話をしているのであった。
「もう読み終わったからね。だからね」
「けれどその漫画って確か」
お母さんは今我が子が持っているその漫画を見て言う。見ればその漫画は。
「あんた物凄く探していたじゃない」
「そうだったね」
素っ気無くお母さんに答えた真次だった。

「確か古本屋をあちこち回って全巻揃えたんだったね」
「そんな漫画を捨てるの？」
怪訝な顔で我が子に問うた。

第二章

「そんなに簡単に」
「だからもう読み終わったから」
やはりここでも素っ気無い声であった。
「もういいんだよ。これでね」
「そうなの」
「うん。だからね」
いいというのである。
「古本屋に売ってお金に替えるよ」
「それでまた漫画を買うのね」
「そういうこと」
結局はそうなるのだった。要するに漫画を買う為に漫画を売るのである。
「それじゃあさ。行って来るね」
「もうちょっと大事にしたら？」
お母さんは彼があまりにもあっさりと漫画を捨てるのでいたたまれなくなって言ったのだった。その顔は眉間に深い皺が刻まれている。
「もうちょっとは。どうかしら」
「だから。汚してもいないし破いてもいないし」
「そういうのじゃなくて」
お母さんが言いたいのはそういうことではなかった。我が子にそのまま受け継がれているその大きな目は顰められて細いものになっていた。
「もっと置いておいたらってことよ」
「だって置いていても邪魔になるだけだし」
「邪魔って」
お母さんはその言葉にも思うところがあった。

「そういうものなの？あんたにとって漫画って」
「そうだよ」
「宝物じゃなかったの？」
今度はこう問うたのだった。彼はいつも自分が持っている漫画は宝物だと言っているのである。今その言葉を彼に返したのである。
「確か」
「そうだけれど？」
「それじゃあどうしてそんな簡単に捨てるのよ」
また彼に対して言うのであった。
「そんなに。どうしてよ」
「どうしてって言われても」
実はお母さんがどうして今こんなことを言っているのか。真次にはさっぱりわからなかた。
「あまり置いておいてもさ。邪魔になって」
「宝物が邪魔なの？」
「うん。だから新しい漫画を買う為にもね」
「あっさりと売るのね」
「置き過ぎてもあれじゃない」
別の理由を話に出してきたのだった。
「部屋の底が抜けるし」
「それはないわよ」
そのことに関してはすぐに否定したお母さんだった。
「うちの家はそんなに脆くはないから」
「大丈夫だっていうの？」
「そうよ。だからね」
このことを言ってからまた述べるのだった。
「そんなに簡単に捨ててもね」
「駄目だっていうの？」
「もうちょっと。大事にしてみたら？」
怪訝な顔で我が子に告げた。

「漫画。どうかしら」
「大事にはしてるよ」
「そう思うのだったら簡単に捨てたりしたら駄目よ」
お母さんが言いたいのはそれに尽きた。
「折角買ったんだから。勿体ないでしょ」
「そうかなあ」
「全く。何かが違うのよね」
お母さんはどうしてもわからないといった感じの我が子に溜息ばかりであった。そんな彼だったが相変わらず漫画を集め続けていた。そしてそんなある日のことだった。
晩御飯前のニュースを観ているとだった。あるニュースが入って来た。それは。
「あれっ、これって」
「どうしたの？」
「凄いニュースなんだけれど」
テレビを見て言う真次だった。
「ほら、観てよお母さん」
「何よ、晩御飯の支度があるのよ」
「だから観てって」
「全く」
トマトを切ろうとしたところで手を止めてテレビのところに向かう。そうしてそのニュースを観てみると。
「漫画の図書館？」
「うん、閉鎖するらしいんだ」
どうやらそういうものがあったらしい。だが色々な事情で閉鎖するらしい。そのことがニュースになっていたのだ。
「何でも身体が弱くてずっと漫画を集めてそれを図書館を開いてね」
「読めるようになっていたのね」
「ところがね」
事情があって閉鎖するというのだった。しかし話はそれで終わり

ではなかった。
「それで真次」
「うん」
「このニュースがどうしたの？」
「ほら、それでね」
何故かここで真次の声が上ずっていた。目もキラキラとさえしている。

第三章

「その漫画だけれどね」
「そういえばどうなるのかしら」
図書館を閉鎖するからだ。それでは残った漫画はどうなるか。問題はそれであった。
「漫画は。どうなるの？」
「譲ってくれるらしいよ」
真次の目がさらに輝いた。
「漫画を好きな人にね」
「漫画を好きな人に」
「ほら、連絡先」
ここでニュースに連絡先が出た。住所に電話番号、郵便番号までしっかりと出ている。そうして彼はそれをメモに書いているのだった。
「見てよ」
「それであんたその漫画を欲しいのね」
「そうだよ。譲ってくれるんだよ」
また言う真次だった。
「だったらね。是非共」
「駄目よ」
ところがお母さんはここで厳しい声を息子にかけたのだった。
「それは駄目よ」
「駄目って？」
「その漫画ってどういうものかわかってるの？」
見れば表情も厳しいものになっていた。その厳しい顔で彼に言うのである。
「漫画は」
「だから。漫画でしょ？」

「ただの漫画じゃないのよ」
今度はこう息子に告げた。
「それはね」
「ただの漫画じゃないって？」
「だから。この人が大切に集めた漫画よ」
丁度テレビにその図書館の主のその人が出て来ていた。見ればその顔は本当に無念そうである。本当は図書館を閉じたくなかったのがよくわかる。
「その漫画を。捨てられるの？」
「捨てられるって」
「あんたいつも漫画を捨ててるわね」
このことも真次に言った。
「いつも。今度もそうするのよね」
「多分」
こう答えた真次だった。
「だって。いつもそうしてるから」
「だったら余計に駄目よ。あんたは今あの人から漫画を譲り受けてはいけないわ」
「どうしても？」
「そう、どうしてもよ」
その言葉は全く動くところがなかった。
「あの人が大切に思っていた。宝物だから」
「宝物・・・・・・」
「宝物を捨てられて笑顔になる人がいるかしら」
お母さんの言葉は続く。
「そうでしょ？わかったら」
「駄目なんだ」
「何があってもね」
「そうか。宝物なんだ」
真次はここで遂にわかったのだった。今テレビで苦渋の顔をして

いるこの人は漫画を宝物として大切にしていた。けれどその宝物を手放さなくてはいけない。その辛く悲しい気持ちを理解したのだ。そうしてその気持ちがわかった彼は。メモを手にして破り捨てたのだった。

「じゃあ。僕が持ったら駄目だよね」

「そうよ。それはね」

「わかったよ。電話も何もしないよ」

「ええ。そうしなさい」

「宝物は大事にしないといけないんだ」

そのことを心の中でも咀嚼する。

「そうだね」

今そのことがわかってきたのだった。全部わかったわけではないけれど。それでも少しでもわかった。真次は一つ成長したのだった。

「じゃあ。漫画を少しは大事にできるわね」

「うん。これからはね」

微笑んでお母さんの言葉に頷いた。彼にとってはずっと心に残ったことであった。ずっとずっと。

宝物　　完

２００９・１・５

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5523g/

宝物

2010年10月8日15時31分発行